

诗

9
2020

第9卷第9期



銀糸の雨

能村 研三

コロナ禍の新語

七月のはじめに中央例会を再開したものの、新型コロナウイルスの感染者が再び増加傾向となり、一向に収まる気配がないため、八月の中央例会は会場での開催を断念し紙上句会に切り替えることにした。

コロナ禍の状況となつて早くも半年の月日が経つてしまうことになるが、この短い期間の中で世の中の状況が目まぐるしく変化していることに驚愕の念を禁じ得ない。

次々と新しい言葉が世の中で使われるようになり、コロナ禍の新語が俳句にも詠まれるようになってきた。それも物珍しく時事俳句的に詠まれるのでなく、もはや生活の一部の言葉として使われているようにも思える。

コロナ禍での新語を例にあげると、三密、オーバーシュート、ロックダウン、感染爆発、ソーシャルディスタンス、ステイホーム、リモート、不要不急、濃厚接触、夜の街、アベノマスクなどなど。この他にもたくさんあるようだが、それだけ関心のある言葉として短期間に人々の間に

青田 満々 銀糸の雨を受くるかな

非通知の着信を聞くハンモック

一本の荒草を抜く真顔かな

巻き締まりよき甘藍の重さかな

菅貫の縄の切口鋭かりけり

照り降りの空明るくて昼寝覚

擦り落ちる雨滴の愉悦青すすき

白桃を啜る真顔は何惟ふ

着岸の波の被さる箱眼鏡

土用芽のくれなゐを見て身養生

浸透してきたのだろう。

ただ「新しい日常」という言葉とその使い方にはいささかの疑問を感じる。これは、コロナ禍による我慢の生活が、そう簡単に解消するものでなく、長丁場でコロナと付き合つていかなくはないけない警告の言葉に聞こえてくる。コロナ以前のようにな人々の自由な行き来が、当分の間は出来ないことを意味する。

一日も早いワクチン開発が望まれるところだが、高齢化が進む中、半年、一年という貴重な期間が有効に使われないことには少し苛立ちを感じる。

早く「いつもの日常」が戻つて来ることを望むものである。

能村 研三

昼寝覚

森岡 正作

滴りや

父は退職後、悠々自適というか、座布団一枚があれば良いというような生活をしてきたが、夏は好んで林の杉の下刈りに私を連れ出した。林とはまさに杉の林立した地域を言い、そうした地域を含め、他の樹木が繁ってこんもりした所が森、さらに森が奥深くより高くなったのが山である。林や森、そして山も一緒のようなものであるが、その中に入れば別世界であり、湧き水があったり滴りがあったりする。言わば格好の休憩場所であり、ともかく涼しいのである。

登四郎先生に「滴りや次の滴りすぐふとり」という句がある。私も両の手のひらを合わせ、滴りを受けては、上を見つめて次の滴りを待った。小粒の球体が太り、表面張力が限界に達して弾けるように落ちて来る。その木漏れ日に染まる滴りの輝きは神々しい。金剛の一粒と詠まれた「露」、連山の影を映すと詠まれた「芋の露」も神秘的である。それゆえ、「滴り」も「露」もすぐ消えるものでありながら、その一瞬の輝きは人間に充実感を与えてくれる。先生の御句にも写生から写生を越えるものを感じることができるのである。

予科練の基地を昔に青田波
昼寝覚しばらく人を窺へり

夏野にも区画ありけり馬防ぎ

角川「俳句」8月号掲載4句

梅雨深む鼻緒の太き父の下駄

はじき豆一男二女を育てけり

山荘に火蛾の狂ほし貴腐ワイン

ワイン乾杯どこかに黴の育ちをり



能村 研三

紫蘇の香や雨後の畑を抜くる風 角口 秀子

畑で栽培されるもののほか庭などで種がこぼれて自然に生えてくるものもある。夏になると紫色に広がった葉に香気があり色も美しい。緑色のものは青紫蘇で薬味などに使い、紫の紫蘇は梅を漬ける時などに使う。雨が降った後などはその香は際立つて畑を駆け抜ける。

耳打ちのごと茉莉花の香に寄りぬ 小倉 征子

茉莉花はジャスミンとも呼ぶが、これほど濃厚な匂いの花は少ない。インド原産の常緑灌木で暖地性である。五、六月頃、幹も緑色の枝先に芳香のある白い花をつける。耳打ちをしているように香を嗅いでいる仕草はジャスミンの花の雰囲気と敵っている。

梅雨深む粒子の粗き黒砂糖 佐藤 克江

さとうきびの搾り汁をそのまま煮詰めて作られる黒砂糖は飲み物や和菓子などに使われる。濃厚な甘さと、強い風味があるが見た目は粒子が粗くごつごつとしている。梅雨も末期、外は梅雨雲が重く垂れ込めて陰鬱な日が続く。

その中の一匹蛭吾に寄り来 長岡 千波

また薄明るい空を時々仰ぎながらじつと待っていると、ひとつ、またひとつ光り始め、気がつくとなんかの闇の中にいた。青白く光るものが胸の辺りを横切り、吾に近寄ってくる蛭がいた。つい先年ご主人の新一さんが亡くなったばかりだ。

滴りの暗がりに座す磨崖仏 千葉 禮子

磨崖仏は大分県の臼杵や国東半島を旅した時に見たことがあるが、人が容易に上がれない険しい岩壁に彫られているものが多い。石仏の一種で、自然の懸崖や巨石を彫刻し、仏像などを陰刻や浮彫りで表したものをいう。インド、中央アジア、中国などにも多く、日本には奈良時代に伝わったと言われている。薄暗い懸崖の巖から染み出た滴りが滴を落としている。こんな険しいところに仏の姿を彫り上げた先人たちの思いに浸り、敬虔に拜することにした。

墓 一步あゆめば 一步老ゆ 中村 重幸

グロテスクで、人にはあまり好かれない墓の動作は鈍重で、石などを投げてでもなかなか動かない。墓がゆっくり重々しく歩む姿を見ているとその一步ごとに老いを重ねていくように思えた。その鈍重な動きを見ていると墓だけでなく、我が身の老いにも通じるものを感じた。

能村登四郎の軌跡〔25〕

能村 研三

賜りしこの一年をひしと抱く

『羽化』平12

句集『芒種』の後書には、「今はこれと言って病はないが、何と言つても八十八の老軀はしんどい。そんな中で毎月の作品を発表しなければならないのは辛い。しかし考えを変えると老いてもこのような仕事を持っていることは男として倅せなことで」と述べている。この頃から登四郎は「沖」の句会も休みがちとなり、川崎の長女の萌子の家で過ごすことが多くなった。九十歳を間近にして日々を大切に生きたいと思つたのである。まさに一日一日をひしと抱きながら暮らしたのだった。同時作には「去年今年去年今年とて今更に」の句もある。

春潮の遠鳴る能登を母郷とす

『羽化』平12

この年は「沖」の創刊三十周年の記念の年で、お祝いの会は和倉温泉加賀屋で行われ、程近い弁天崎公園に句碑が建立された。能登和倉は登四郎の祖父の生誕地で能村家にはゆかりのある地、「沖」同人の天谷多津子の計らいで建立の計画が進められた。祖父は登四郎の名付け親でもあり、登四郎はこの土地には特別な思いがあつた。同時作で「青き能登師の地父祖の地わが名の地」の句もある。句碑開眼の後、羽咋の折口信夫父子の墓前に詣でて帰途についたが、この旅が登四郎の最後の旅となつた。

月明に我立つ他は箒草

『羽化』平12

月明の中に我と箒草だけが存在する不思議な空間。平成十二年「俳句研究」九月号初出。鈴木鷹夫は「この一句を得るために何十年という俳句のプロセスがあつたのではないか。客観写生の句で今までのひねりや銜いが一切ない『登四郎浄土』と言わしめる句である」と評している。宗左近は「宇宙の命の亡骸＝霜への、こんな荘重な挽歌はないであろう。」と言ひ、登四郎を「いつまでも優しく強い芸術家」であると語る。年齢を重ねてこそ見える世界、正にもの見えたる光であろう。登四郎亡き後五年目に能登羽咋の正豊院に句碑が建立された。

行く春を死でしめくくる人ひとり

『羽化』平13

平成十三年「沖」六月号掲載。「中村歌右衛門逝く」と前書きがあり、五百字随想では「歌右衛門逝く」という題で「歌舞伎の一つの時代は終わったと思つた。私にとつて歌右衛門の名舞台をずっと観続けてきたことは大きな幸せだったとつくづく思う。」と記す。登四郎の絶筆である。名女形が亡くなつたのは、三月三十一日。同年の五月二十四日には、五歳年長だつた登四郎も卒寿で逝く。同世代のスター役者が亡くなつた。そのことだけを、ぼつりと述べている。この句の「人ひとり」は登四郎が俳句にかけてきた人生そのものに思えてならない。



蒼茫集



朝 顔

辻美奈子

ひと雨の

大川ゆかり

*朝顔に夜の折り目の残りけり
自転車で登りきる坂椎匂ふ
縁ある地なべてふるさと顔の花
夏至の日食正直者にしか見えぬ
消ゆるとき虹にかすかな銀のこる
どちらでも良きことばかりさくらんぼ

さかしま

大沢美智子

箱眼鏡

広渡敬雄

いつぽんの黒松夏に入りにつけり
新茶淹るるその旋律に母います
信濃毎日軽井沢局四葩咲き
鮎の腑の苦きを食うべ夜目の効く
群青の山影寧し水すまし
*さかしまに蜜吸ふ鳥や沖縄忌

草々の尖つてきたり太宰の忌
D 51の据えられてある夏野かな
太郎冠者夏足袋たんと踏みにつけり
山清水われ一本の山毛櫨となり
押しのけし蓮が頬うつ蓮見舟
*ガガーリン見し地球とも箱眼鏡

天使の梯子

千田百里

*山滴る人に会はねば言葉痩せ

吾の心音かくや新樹に耳当てて
一心は無心に似たりダイビング
巴里祭やパリの地踏まず夫婦古い
晩節を灯すよ手花火の朱珠
*木洩日は天使の梯子夏休み
蟻たちに出合ひがしらと言ふがあり

指を沈めて

荒井千佐代

*通し土間黒光りして梅雨きざす

時折はしづき被りて根魚釣
身の裡に潮満ちぬたる良夜かな
*曼珠沙華もたれ合ふこと一切なし
鶏頭刈らる戦ひに負けしごと
鍵盤深く指を沈めて原爆忌
雁渡し磯の小石のもみ合うて

春 雷

木村公子

夕顔の咲きて貴なる闇となる
白日傘ななめに人の恋しき日

一 途 栗原公子

海遠くなりしと思ふ青葉木菟
あの事にこだはり過ぎて戻り梅雨
雷はげし壺より花の立ち上がる
*はじまりがあれば終りも滝落つる
海光をこぼして売らる初鯉
野火走る誰かに追はれ追ふごとく

潮鳴集



静かなる夜

小川流子

*雲の峰育てる夢と捨つる夢
静かなる夜は海月になりたくて
梅雨あがる五体生き生き使ひをり
駄菓子屋に色あふれて夏休み
草むしる時も己も忘れをり

寺の道

鈴木一広

*父の日や父の父知る寺の道
夕闇や梔子の香の仄かにて
紫陽花のこゑ聞くやうや朝の雨
残したき砂文字崩し男梅雨
見るほどに夏雲どこか人の顔

父の日

川高郷之助

蟻の列とくに分派を為すもみて
*父の日といふも構はれざる自由
ビジネス本捨てし書棚の涼しさよ
ハーモニカ吹く葭切の領分に
そつと寄ることを覚えて捕虫網

昭和の底

森村江風

緑青の息吹き返す梅雨入かな
トマト齧る指に纏はる少年期
捕虫網夜気を攫ひて凱旋す
*水中花昭和の底の純喫茶
人が人さらに隔つる今日大暑

沖作品



能村研三選

村長の家に残りし竹夫人

青森

千葉 禮子

*滴りの暗がりに座す磨崖仏

しばらくは機嫌よき母更衣

陸奥湾を歩き交ふ船や大西日

次々に母の夏帽かぶる姉妹

一草もゆらさず蛇のあらはるる

千葉

中村 重幸

*墓一步あゆめば一步老ゆ

螢の切り取つてゆく里の闇

涼しさや水の底へと絹一丁

空白の増ゆる日記や梅雨に入る

桑の実や遠回りする帰り道

千葉

角口 秀子

波音に耳を澄ませる蝸牛

風薫る琵琶後ろ手に天女像

流木の砂色となる炎暑かな

*紫蘇の香や雨後の畑を抜くる風

落日の余韻や四万六千日

福岡

小倉 征子

病葉のするりと渦へ引かれけり

*耳打ちのごと茉莉花の香に寄りぬ

一對の蹄鉄棚に青葉光

青鷺の水に声曳く夕べかな

父が先づ走る父の日参観日

市川市

佐藤 克江

晝闇のてつばう百合の香に明くる

*梅雨深む粒子の粗き黒砂糖

太陽へ天道虫の羽根割りぬ

尺蠖の空へと伸びて泳ぎをり

魂の浮遊するかに蛍舞ふ

山梨

長岡 千波

*その中の一匹蛍吾に寄り来

栈橋のきいきいと鳴る大南風

イーゼルを組む夏帽の広き鏝

刺を抜く縫針の先緑さす